

未来への取り組み～更に飛躍する全学共通科目

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室室員／
外国語教育研究センター准教授 三島 雅一

大学教育研究フォーラム創刊から27年目となる本号では、先の見えないコロナ情勢下にあっても不断の歩みを続ける全学共通教育の一端を本学教職員並びに関係者の皆様と共有させていただきたい。

本学は2024年に創立150周年を迎える。この重要な佳節を荘厳すべく新時代の教育の創出に向けて多くの試みが実施されている。本号の特集では、次世代の「英語の立教」を志向する座談会から、本学が進める新たな英語教育の形が垣間見える。「伝統的教育」から「変容的教育」への変遷、共通参照枠組み(CEFR)の外国語教育における目的と意義、英語で実施されているF科目の展開と学部によって展開されているEMI科目についてと多岐に渡る報告と意見交換の様子が詳細にレポートされている。

また2021年に実施された全カリシンポジウムからは、高度に発達した情報社会である現代に必須となったデータサイエンス教育の現在と未来について興味深い内容が報告されている。

更にコロナによって常態化したオンライン授業であるが、その経験と実践について総合系科目担当教員たちの取り組みについて学び多き事例が報告されている。加えて「授業探訪」では新必修英語科目「English Debate」の歩み、言語系自由科目スペイン語からは学生の達成感を高める為の実践と結果、そして総合系科目スポーツ実習では和太鼓を通じたユニークな授業実践をクローズアップして報告している。

最後にエッセーのセクションではベテラン教員3名による全カリとの関わりと先生方の本学における教育の「歴史」をご共有いただいた。いずれも本学における全カリの意義を再確認させていただける含蓄ある内容となっている。

総じて本号は全カリの更なる展開と飛躍を示唆する教育への熱を帯びた一冊であると確信する。日本屈指の実業家である松下幸之助曰く、「一方はこれで十分だと考えるが、もう一方はまだ足りないかもしれないと考える。そうしたいわば紙一枚の差が、大きな成果の違いを生む」。まさにこの紙一重の差を十全に示し続けていく事が本学の更なる発展に不可欠であると感じる。本号を教職員の皆様にご覧いただき、本学の更なる発展にご尽力いただければ幸甚である。